
相談物語

刃下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相談物語

【Nコード】

N2892Z

【作者名】

刃下

【あらすじ】

八九寺が皆さんの相談にのるはずのおはなし

一話目（前書き）

塾がやける前のおはなし

一話目

閑散とした教室内。

広い部屋の中にぼつんと置かれた四つの机。

二つずつ、向かい合わせで置かれている。

「何で僕はここに連れてこられたんだよ」

僕は向かいに座っている少女に疑問を投げかけた。

「ふっふっふっ、それはですね阿良々木さん。これから私が皆さんの悩みをばったばったと解決していく、お悩み相談室をはじめのからですよ！」

少女は勢いよく椅子から立ち上がった。

おかげで元々塾だったこの教室の床と椅子の足がこすれる音が部屋中に鳴り響く。

「へー」

僕は小指で鼻くそをほじりながら、八九寺の熱弁に耳を傾けた。

「私は仕事柄よく街をぶらついているのですが、道で会うすべての人が暗い顔をしています。この世は不景気。皆さんが意気消沈なのも分かります。誰しもが心のどこかに悩みを抱えているのです。そ・

こ・で、この八九寺まよいが皆さんの相談にのろうではないかと思いい、立ちあがりました！」

八九寺はどこかの大統領みたいに大袈裟に身振り手振りを交えて説明する。

ていうか、お前が街をアリののように歩き回っていたのは仕事だったのか。

「何故こんな茶番を繰り広げているのかは分かったよ。でも言うほど皆、暗い顔してるか？」

「してますよ！そんなマヌケ面しているのは厚顔無恥でブルジョワな阿良々木さんくらいなものです」

「ぐっ……じゃあなんでそのマヌケ面した僕はここに呼ばれたん

だよ。僕の悩みを聞く必要はないじゃないか」

「ええ、阿良々木さんの相談にのる気はありません。それは解決できないことですから」

八九寺は声のトーンを落としながら言った。

えらく簡単に僕の悩みを諦めてくれるじゃないか。

まあ八九寺には吸血鬼について少なからず教えているからな、気をつかってくれたのかもしれない。

「どうせ阿良々木さんの悩みなんて、妹さんに手を出しそうだとか、彼女の後輩に手を出しそうだとか、妹の同級生に手を出しそうだとかそんなことなんですから」

「違うわ！」

気なんて一つも使っていないかった。

「まさか小学生である私に手を！？」

「・・・」

「否定して下さい阿良々木さん、怖すぎます！」

「それで結局のところ僕はなんで呼び出されたんだよ」

「ああ、そうでした。阿良々木さんには私の助手になっていただくうと思ってお呼びしたのです」

「助手だって？」

僕は眉間にしわを寄せながら、八九寺の次の言葉を待った。

「ええ、助手です。嫌ですか？」

「嫌っていうかさー。何するんだよ、悩み相談の助手って」

「そうですね、例えばお客様が来た時にドアを開け閉めしたりですとか、万が一悩み相談で私がまずい事を言った時も、助手である阿良々木さんが横でうなずいていれば、多少なりと信憑性が上がってお客様をうまく騙せるかもしれないじゃないですか」

八九寺は笑顔で恐ろしいことを言った。

なんだその第三者を使った心理誘導は。

まるで詐欺師や宗教勧誘の常套手段みたいじゃないか。

「僕はそんな詐欺行為のようなことはしないぞ。だいたいお前の言ってる助手は世間では雑用、あるいはさくらって言うんだよ」

「阿良々木さん。阿良々木さんは今、助手という職業がどれほどホツトな職業なのか知らないようですね」

「何っ!？」

八九寺は、はあっとため息をつきながら僕の側へと歩み寄る。

「助手。それはつまり誰かをサポートするための職。そのサポートの仕方によっては恋が芽生えることだってあるんですよ」

「な、なんだってえ!？」

「ある時はアメリカ帰りの天才。またある時は人工的に作られた人型の女子高生ロボット。どうです、阿良々木さん。阿良々木さんも過去にメールを送ったり、黒猫と喋ってみたいはありませんか!」

「ねーよ」

一人熱くなつた八九寺を見ると、逆になんだか落ち着いてきた。
「おほん、失礼しました。阿良々木さんなら意気強盗してくれると思います」

「意気強盗?」

「失礼、噛みました。意気投合してくれると思います」

「お前も普通に噛むことがあるんだな」

「ええ、返す言葉ありません・・・」

八九寺は腰を折り、深く頭を下げた。

「それにしても、急に呼び出されるから何事かと思ったよ」

「ええ、私も急な事なので阿良々木さんを捕まえれないかと思いましたが」

「八九寺、ら抜き言葉になってるぞ」

「おっと、これは失礼しました。あきさん」

「人の名前から、らを抜くな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「これはわざとだ」

「失礼、かまままま」

「はなからちゃんと言つ気ないだろ・・・」

「それでは阿良々木さん。さっさとお客様を呼んじやってください」

「え、僕が呼ぶの？」

「当たり前じゃないですか！呼ばずにこんな廃墟に入ってくる人なんて、ホームレスか警察ぐらいですよ。ささっ、急いで呼んじやってください」

「ああ・・・」

僕は携帯電話を開き、少ないメモリーの中から一つを選んだ。

一話目（後書き）

これは不定期更新
よかったら他のも見えてね

二話目（前書き）

いろいろおかしいかもしれない
でもきつとだいじょうぶ

二話目

「それで、どうしてそのお悩み相談に私が呼び出されなきゃいけないのかしら阿良々木くん」

眼光鋭く僕を見据えた戦場ヶ原。

「いや、本当に悪いと思ってるよ」

手を合わせながら頭を下げる。

「阿良々木君、私の記憶が正しければ今日のあなたは自宅で勉強をしているはずよね」

「うつ・・・」

数学以外のテストの点数が平均点の真上を這うほどに悪かった僕はある日からクラストップの羽川と成績優秀の戦場ヶ原に交代制で勉強を教わっている。

順番的に言えば今日は羽川の順番なのだが、用事があるとかで自宅での勉強を言い渡されていた。

携帯メールでページから問題番号まで指定して、羽川が考えるこれなら一日でこなせるだろうという絶望的な量の課題が出された。

驚くべきことに僕がつまりきそうな問題を先読みして解説まで書いてある。

もしかして羽川は僕の買った問題集の中身を全部暗記しているのだろうか？

羽川ならあり得なくもないな。

「そこまでしてもらっておいて、全く手をつけていなかったら流石の羽川さんも怒るんじゃないかしら」

「ごもっともでございます・・・」。

あまりに多い課題に、昼飯食べてから本気でやろうなんて現実逃避して午前中は全然机につかなかったもんで、今日はまだ問題集を開いてすらいない。

それもこれもこのドアの向こうにいる年中生足のツインテイルのせ

いだ。

「猫を殺せば七代崇ると言うけれど、猫に殺されたら何代先まで崇ればいいのかしら？ね、阿良々木くん」

「ぐっ・・・何でそこで猫が出て来るんだよ」

「さあ、何故かしら？」

戦場ヶ原は涼しい顔で笑った。

「・・・それにしても気合の入った格好で来たんだな」

戦場ヶ原はスカートをひらりと揺らし、側にじりじりと寄ってくる。今日の戦場ヶ原は戦場ヶ原の家で勉強会をする時とは違う、よそ行きの衣装だ。

「阿良々木君にしてはいいところに気がつくじゃない。理由を教えてくださいのかしら？」

「ん、まあな・・・」

「阿良々木くん、ここに来るまで一切呼び出した理由を言わなかったでしょ？そしてメールにはここに来て欲しいとしか書いてなかったわ」

「そうだな、確かに悩み相談うんぬんを伝えてなかったのは悪かったよ」

「次のメールには忍野さんは不在だと書いてあった。つまり私は廃ビルには阿良々木君しかいないと思っていたの。つまり・・・」

戦場ヶ原は白い指で僕のアゴをくいとあげる。

まさか・・・。

「私は阿良々木君に廃ビルで二人きりで会いましょうと誘われたと勘違いしてここまで来たの」

すごく怒ってらっしゃる！

戦場ヶ原は僕の髪の毛を一本つまむと、僕の目を見つめながらゆっくり引き抜いた。

「す、すいませんでした」

空笑いと冷や汗が同時に出る。

しかし謝罪は戦場ヶ原に届かなかった。

「私もう阿良々木君殺しちゃってもいいわよね。これだけの辱めを受けて・・・あつても駄目か。阿良々木君すぐ再生しちゃうし。それに阿良々木君を殺しちゃったら私は自分を殺さなきゃいけないわ。どうしましょう・・・うふふ」

目の前の彼氏が死んだ後の想像をする戦場ヶ原が自分の世界から戻ってくるのを待つ。

「阿良々木さん、ちょっときてください」

ドアを少しだけ開けて、八九寺が僕を呼び出した。

「何だよ、ちゃんと呼んだぞほら」

「ほらじゃないですよ、阿良々木さん。とりあえず緊急に申し上げなければいけないことができました。阿良々木さんだけ入ってきてください」

「どうした？」

実は僕が政府に作られた人工のアンドロイドで、代わりなら何体でもいるというところまで空想が進んだ戦場ヶ原を置いて、教室の中に入った。

「阿良々木さん、何でよりにもよってあの方なんですか」

「お前が誰か呼べって言ったんだろ」

「言いました、言いましたけど」

八九寺はため息をつきながら、僕を諭すように続ける。

「あの方、私のこと見えないし私の声も聞こえないでしょ」

「あつ」

うつかりしていた。

そういえば戦場ヶ原って八九寺の姿見えないんだっけ。

まずいな、このまま行くと戦場ヶ原が僕に悩み相談をしているだけになるぞ。

プライドの高いあいつのことだから、最悪何の悩みも打ち明けないってことも考えられるし。

「はぁ・・・」

八九寺はもう一度ため息をつき、置いていたリュックサックを背負

いなおした。

「もういいです、阿良々木さん。私は他の教室に行ってるんで、どうぞお二人でちくりあつて下さい」

足元を見ながら、ぽつぽつと歩き始める八九寺。

悪い事したなあと思ったが、僕にも疑問が一つ浮かんだ。

「僕が呼べてお前が見える相手って誰だよ」

八九寺はその場でぴたっと歩くのをやめて、首だけ向かせる。

「羽川さんがいるじゃないですか」

「羽川は今日用事でいないぞ。だから僕がここに居られる訳だし」

「え、そうなんですか？」

僕と八九寺は一緒に固まってしまった。

「・・・ってことは僕が呼べてお前が悩み相談にのれる相手なんていないんじゃないか？」

「てんまつほんとうでしたね」

「それを言うなら本末転倒な」

二人で顔を見合わせて笑う。

「だいたい阿良々木さんの友達の少なさがこの問題の起因じゃないですか！」

と、思ったら急に噛み付いてくる八九寺。

「なんだとー!？」

そのまま子供の喧嘩に発展する。

「じたばたと何をやってるの阿良々木君」

自分の世界から戻った戦場ヶ原が、教室内の騒がしさに気がつき入ってきた。

まずい、このままだと僕は一人で取っ組み合いをするやばいやつになってしまう。

あれ、こんなこと前にもあったような・・・。

「ぐるるるるるるがあああああ」

僕は八九寺から離れようとするが、八九寺はいまだ猛獣の如く僕に噛み付こうとしていてなかなか離れない。

こうなれば一回揉みしだいて動きを止めるか？

「阿良々木君、・・・一体何をしているのかしら・・・」

「ちょ、待ってくれ戦場ヶ原。今やめるから」

「小学生女兒に何をやっているのか、説明してくれるかしら阿良々木曆君」

「「え！？」」

喧嘩はあっけなく止まった。

二話目（後書き）

不定期更新です

よかったら他の書いたやつも見えてね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2892z/>

相談物語

2011年12月16日06時55分発行